



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

心を込めて

仕事をしましょう

繁栄はんえいの法則ほうそく

—— やりがいを見出す ——

本題ほんだいに入る前まえに、〃なぞなぞ〃を出だそうと思おもいます。

「食たべるととても元氣げんきに働はたらくことができる貝かいはどんな貝かい？」

答こたえは「やりがい」です。

仕事しごとの〃やりがい〃は即すく〃生きがい〃に通つうじていきます。世の中よなかには「私わたしは趣味しゅみに生きている」とか「余暇よかが大事だいじだ」という人ひとがいますが、仕事しごと以外いがいに費つひやす時間じかんはしれたもので、仕事しごとをしている時間じかんの方がずっと長いものです。人生じんせいの中心ちゅうしんは仕事しごとですから、その仕事しごとにやりがい

あるということは、それが即すく、生きがいいきがいに繋つながっていくのです。

横浜市長よこはましやうの林文子はやしかみこさんが「人生じんせいは仕事しごとの中なかでしか学まなべません。仕事しごと以上いじうに楽たのしめるものはないと思おもいます。働はたらくというこは素晴すばらしい。辛いつらこともあるけれど、自分じぶんが磨みがかれ、心こころが豊ゆたかになっていきます。私わたしの場合ばあいは、生きていくこと即すく、仕事しごとをすることだと言いってもいいくらい、仕事しごとを大切たいせつにしています」と言いっておられます。

では、どのような心持こころもちで仕事しごとをすればいいかということですが、アメリカにマーチン・ル

「サー・キングという、黒人の牧師さんがおられました。当時のアメリカは人種差別がとても激しく、その人種差別に対して戦った人がキング牧師です。

キング牧師がワシントンに数万人を集めてされた講演が非常に有名です。この講演の第一声が「I have a dream (私には夢がある)」でした。その夢というのは、黒人の自分の子どもと白人の子どもが一緒に机を並べて学校で勉強することです。小さな夢のように思えますが、実はこれが人種差別の国、アメリカでは非常に大きな夢だったのです。未だに語り継がれる有名な演説です。

このキング牧師が仕事に関して素晴らしいことをおっしゃっています。

「もし道路掃除の仕事を与えられたら、ミケランジェロが絵を描くように、ベートーヴェンが曲を作るように、シェークスピアが詩を書くようにするべきだ。天国の神さまと地上の雇主を素晴らしい掃除人がいるな」と感心させるくらいにしつかりとやるべきだ」

「芸術家はその仕事に取り組むように、道路掃除をしなさい」と言われているのです。

私が大学生の時、友人が「将来の仕事は何にしようか」と悩んでいました。早稲田大学には雄弁会という、政治家やジャーナリストを目指す人の集まるサークルがあります。彼はその大先輩に「将来、何をしたらいいでしょうか」と聞きに行きました。結局、ジャーナリストに

なりましたが、その先輩は彼に「とにかく、何にしても芸術の域に達するまでやることだよ。どんな仕事でもその域に達したら大したものだ。何を選んでもいいが、それくらいの心がけでやるべきだ」と言われたそうです。これが彼の座右の銘のようになり、事あるごとに「何事も芸術の域に達するまでやらないといけない」と言っていました。

仕事は人に喜んでもらうために一生懸命するべきです。あるアメリカの鉄道会社の社長さんが線路の修理現場を視察してまわった時、一人の作業員が親しげに話しかけてきました。

「久しぶりだね。君も随分出世したものだ。君が社長になったと聞いたときはとても驚いた

よ」。よく見るとその作業員は、社長が入社した時に一緒に入った人でした。同じように作業員として働きたたのですが、片や作業員のま、片や社長になった違いはどこにあったのでしょうか。答えは次の会話です。

その作業員が「十年前は一緒に五十ドルの日給をもらうために働いていたのに、君は変わったね」と言ったのです。すると社長は「そうだったのか。君は五十ドルをもらうために働いていたのか。私は入社した時から今まで、会社のために、そして、世の中の人達に快適な旅をしてもらうために働いてきたのだよ」と言いました。

この心構えが、結果的に社長と作業員という違いを生んだのです。

似た話にたはながヨーロッパにあります。三人のレン
ガ職人しよくにんの話はなです。大きな修道院しやうどういんの建築現場けんちくげんばで三
人のレンガ職人しよくにんが働いていました。その修道院しやうどういん
は、完成かんせいまで百年ねんくらいかかるだろうと言われ
ていました。その作業員達さぎやういんたちが生きている間あひだには
完成かんせいしません。そこである人が三人のレンガ職人しよくにん
人に「あなた方は何をなにしているのですか」と質しつ
問もんしました。すると一人目ひとりめのレンガ職人しよくにんは「見
ればわかるでしょう。レンガを積つくんでいるので
すよ。こんな仕事しごとはもうこりごりです」と怒おこつ
た口調くちやうで答えました。二人目ふたりめの職人しよくにんは「レンガ
を積つくんで壁かべを造つくっているのです。この仕事しごとは大
変へんだけとお金かねがいいんでね」と言いました。三
人目さんにんめの職人しよくにんは「私は修道院しやうどういんを造るためにレンガ
を積つくんでいるのです。この修道院しやうどういんは多くの信者しんじゃ

さん達たちの心のよりどころとなるでしょう。私は
この仕事しごとに就つけて幸せしあわせです」と答こたえました。
それから十年ねんくらい経たつてその三人さんにんがどうな
つたかという、最初さいしょの職人しよくにんは以前いぜんと同じよう
に、愚痴ぐちをこぼしながらレンガを積つくんでいまし
た。二人目ふたりめの職人しよくにんは、もつと条件じやうけんのいい仕事しごとが
あると言いわれてその仕事を辞め、賃金ちんぎんはいいけ
れども非常に危険きけんな屋根やねを工事こうじする仕事しごとに就つ
ていました。三人目さんにんめの職人しよくにんは、それからいろい
ろな知識ちしきや技術ぎじゆつを身みにつけ、現場監督げんばかんとくとして活
躍やくしていました。そして多くの職人しよくにんを育て、亡
くなつた後あと、完成かんせいした修道院しやうどういんにその人の名前なまえが
付ついたということです。
できすぎた話はなのようですが、それくらい心構こころがま
えによつて結果けつかけが変わつてくるのです。

喜びを実感する

人間の多くは誰しもただ働くのではなく、働くことの意義を求めていると思います。そして、周りの人に喜んでもらっているということを実感したいのです。その感覚がないと仕事を続けていけません。

上田比呂志さんの書いた『デイズニーと三越で学んできた、日本人にしかできない〴〵気づかいの習慣』という本に、アメリカのフロリダにあるウォルトデイズニー・ワールドリゾートで働いていた時のことが書かれています。上田さんはそこで日本館を任されたのです。そこでは日本のいろいろなことを紹介したり、日本食を提供しており、働く人のほとんどが日本人でした。料理を作ることも運ぶことも日本人がし

ていましたが、ある仕事だけベトナム人がしていました。それは、食事が終わった後に机をきれいにして、テーブルクロスを張り替え、食器をまたきれいに並べるという仕事でした。しかし、その仕事が非常に遅かったそうです。すぐにお客さんが並んでしまい、いくら早くやるように言ってもなかなかできません。初め、これは国民性かなと思ったのですが、違いました。お客さんの感謝の気持ちですがベトナム人には伝わっていないかったです。そこで、それを伝えてあげるといいのでは、と思い、「テーブルクロスは張り方がすごく良かったよ。ナプキンの折り方もまた良かったよ。お客さんが〴〵清潔でちゃんとしていて、気分が良かった」と喜んでいらしたよ」とベトナム人達に伝えると、

それからテキパキ仕事をしようになったそうです。そのうちに「折り紙を教えてほしい」と言うので鶴の折り方を教えると、ナプキンを鶴に折るようになりました。すると、ますます評判が良くなり、さらに褒めると、より一層仕事が始まりました。また、ベトナムの人はそれまでほとんど笑わなかったのに、いつの間にか笑顔を見せるようになったそうです。そして上田さんは「彼らにおもてなしとはこういうものだ」と説明するより、自分のやること誰かのためになっっている。気を利かせることで喜んでもらえる」と体感することによって、自分達で考えて行動するようになり、マニュアルさえも必要ではなくなる。感謝の気持ちが変わると必ず人は変わるものだ」ということを言わ

れています。

その通りだと思えます。一生懸命やって、周りの人の喜びが実感できると人間はより頑張れるものです。

—— 物に思いを込める ——

もう一つ大事なことがあります。仕事をする時、祈りを込めることです。『繁栄の法則』という本を書かれた北川八郎さんがおっしゃっていたのですが、非常に良いことだと思いました。北川さんの講演会にパン屋さんが来られたそうです。そこで北川さんが「遠方からありがとうございます」と言うとそのパン屋さんは「実はお聞きしたいことがあつてきました。私はお客様に、本当に美味しい」と言ってもらえる

パンを^{めざ}目指して作^{つく}っているのですが、何^{なに}かが足りない^たような氣^きがするのです」と言^いいました。

そこで北川^{きたがわ}さんが「それでは、パンの中^{なか}に祈^{いの}りの心を^{こゝろ}込^こめたらどうですか。このパンを食^たべた人^{ひと}が安^{やす}らぎ、心の痛^{いた}みが取^とれますように。このパンで多^{おほ}くの人の心^{こゝろ}が癒^{いや}されますように。このパンを食^たべた人^{ひと}が、健康^{けんこう}で活^{かつ}力がわきますように」とい^いうような祈^{いの}りを込^こめてパンを作^{つく}ったらどうでしょう」と言^いうと、そのパン屋^やさんは「それはいい」と言^いい、それ以^い来^{らい}、幸福^{こうふく}の祈^{いの}りを込^こめてパンを作^{つく}るようになったそうです。結^{けつ}果^こ、とても繁^{はん}盛^{しょう}したとい^いうことです。

北川^{きたがわ}さん自^じ身^{しん}の体^{たい}験^{けん}もすてきです。北川^{きたがわ}さんは断^{だん}食^{じき}を何^{なん}十日^{にちかん}間^{かん}もしたり、山奥^{やまおく}で焼^やき物^{もの}を作^{つく}ったりと、宗^{しゅう}教^{きょう}家^かのよう^{よう}な方^{かた}です。最^{さい}近^{きん}はその

焼^やき物^{もの}が評^{ひやう}判^{ばん}になつてよく売^うれているそうです。東京^{とうきょう}のあるデパ^てー^とで個^こ展^{てん}を開^{ひら}いた時^{とき}、電^{でん}話^わがかかつて来^きました。百^{ひゃく}貨^か店^{てん}の人^{ひと}が「北川^{きたがわ}さん、どうも苦^く情^{じやう}の電^{でん}話^わのよう^{よう}ですよ」と言^いうので出^でてみると、焼^やき物^{もの}を買^かつた人^{ひと}からの電^{でん}話^わでした。それは、トマ^とト^とで作^{つく}った釉^う薬^{やく}を^をか^かけて作^{つく}った茶^{ちゃ}碗^{わん}でした。その人^{ひと}の奥^{おく}さん^{さん}は随^{ずい}分^{ぶん}前^{まえ}から目^めを悪^{わる}くして、最^{さい}近^{きん}はほとん^みど見^みえなくなつていました。その奥^{おく}さん^{さん}がその茶^{ちゃ}碗^{わん}を手^てに持^もって、「この器^{うつわ}はなん^やて優^{やさ}しいん^だらう」と言^いって、いきなり涙^{なみだ}をボロ^なボロと流^{なが}したとい^いうのです。ですから、それを買^かつたご主^{しゅ}人^{じん}は「呪^{のろ}いのか^けられ^た変^{へん}な茶^{ちゃ}碗^{わん}じやな^なかろう^か」と電^{でん}話^わをし^してきたのだ^のだ^{そう}です。

北川^{きたがわ}さんは、自^じ分^{ぶん}の作^{つく}った器^{うつわ}が、手^てに取^とった

人がもし病氣ならその病氣が少しでも軽くなるように。怒りを持った人ならば、その怒りがどこかへ行ってしまうように」という祈りを込めて陶器を作っていたと言います。その祈りが奥さんにはわかったのです。

物に人間の心が入る、伝わるというのは本当です。昔よく、上野支院の犬飼法尼が「どんな物にでも感謝して、お題目を唱えて使うと長持ちする。冷蔵庫でも洗濯機でも『ありがとうございませす。ありがとうございませす』と心を込めてお題目を唱えて使うと、壊れなくなる。逆に感謝の心がないとすぐに壊れてしまう」ということをおっしゃっていました。その話のある青年会の方にはしました。その青年は精密部品を組

み立てる仕事をしていましたが、手先があまり器用でなく、製品をよく壊して上司にたびたび叱られていたそうです。それを聞いて「とにかくこの仕事ができたいという気持ちを持ち、部品にお題目を込めてください。仕事をしながらでは大きな声が出せないと思うので、心の中でいいからお題目を唱えて仕事をするといいですよ」とお話ししたのです。

すると後日「本当にありがたいです。製品を壊さなくなりました」と、喜んで話してくれました。

何をするにも祈りを込め、お題目を込めると必ず良い方向に向かいます。